

杜甫の「戯題詩」について

—「戯」の意識を探る—

谷口 真由実

杜甫の集に詩題に「戯」の字をもつ、いわゆる「戯題詩」が多く存在すること、また、その文学的な意味については、すでに先行の論文が幾つかある⁽¹⁾。本稿ではそれら先行の論文の考察を踏まえつつ、あらためて杜詩における「戯」の意識を問い合わせし、それが、「戯」の本旨或いは「戯題詩」中みえる一見滑稽な表現のために、従来あまり重要視されなかつたが、実は杜甫の詩の本質と深くかかわつており、杜甫の全体像を理解する上で疎かにできないことを明らかにしたい。

確かに杜甫には「戯題詩」が少なくない。杜甫の集には三十三首の「戯題詩」があり⁽²⁾、杜甫以前の詩人達を始め、杜甫とほぼ同時代の李白の二首、王維の八首と比べてみると、その数がひときわ多いことは、すでに指摘されている通りである。よく杜甫は「一生憂う」と言われるよう辛苦に満ちた人生の苦惱や憂愁をうたいつづけたとされ、一般に生真面目な面貌を持つが、一体何故、「戯題詩」という一見遊戯的に見える詩をこれほど多く作ったのであらうか。杜甫が詩題に「戯」を付したのには当然それなりの動機があつたにちがいないが、本稿の検討はその動機の考察を主とし、

特に幾つかのケースが考えられる「戯題詩」の中でも、詩のモチーフに「戯」が深くかかわっている場合について、「官定まりて後、戯れに贈る」(『杜甫詳註』卷之二)。以下『詳註』とのみ記す) 詩を中心に論じることとする。

二

先ず、簡単に杜甫以前の「戯題詩」について述べておく。管見では、「戯題詩」の黎明は梁代である⁽⁴⁾。梁から隋に至るまでの該当作品は十三首。『文選』には一首も採録されていないが、西本巣氏も指摘しているように『玉台新詠』にはうち八首が選録されている。このことからも推察されるようにその多くは梁の簡文帝を中心とするサロンで作られた。

『玉台新詠』は、その序に「艶歌を撰録し、凡そ十巻と為す」とあるように、男女の情愛、女性に關することを「綺麗」な文体で描いた「宮体詩」を主としているが、この時代の「戯題詩」もその枠組を出るものではなかつた。人、特に多くの場合は女性をからかう詩、或いは、滑稽でその上綺艶な詩を作る才能を競う、極めて戯劇性の強い詩であつた。

隋、そして初唐から杜甫以前の時期も、多くは六朝時代の戯劇性を継承している。注目されるのは、門閥貴族の没落や科挙制度の導入によつて、いわゆる六朝風の貴族サロンは姿を消し、新しい知識人層が形成されるのに伴い、かつてのような艶詩は作られなくなつて、からかいの対象は目上の官僚や知人、或いは同輩が多くなつたことである。⁽⁵⁾また、一部には「戯である」という信号を詩題に示し、象徴的な、或いは滑稽な表現法で、自己の内面の苦惱を吐露する詩も現われた。このように、この時期は宮廷サロンの戯劇的、修辞主義的な詩からの脱皮が進められて、個人の内面に根ざす問題を詩の題材とする詩境が獲得されつつあつたといえる。「戯題詩」全般を見渡すならば、やはり、人をからかう戯劇性の強い詩が多い中で芽生えに留まつているとはいものの、杜甫の「戯題詩」を生む土壤はもうかなり準備されつつあつた。

杜甫の「戯題詩」三十三首の中でも、「戯」が杜甫独特の意識で用いられていて、しかもモチーフに深くかかわっているのが、「官定まりて後、戯れに贈る」である。

不作河西尉 淫涼爲折腰 河西の尉となざるは 淫涼 腰を折るが為めなり

老夫怕趨走 率府且逍遙 老夫は趨走を怕れ 率府に且く逍遙せん

耽酒須微祿 狂歌託聖朝 酒に耽るには微祿を須ち 狂歌 聖朝に託す

故山歸興盡 回首向風飈 故山 帰興尽き 首を回らして風飈に向かふ

私は河西の尉にはならなかつた。⁽⁷⁾ それは、むかし陶淵明が「五斗米のために腰を折ることはできない」と退隠したのと同じく、下つぱ役人に腰を折ることになれば、その空虚さにたえきれないと思つたからだ。年老いた私は、せめて、走り使いのない、率府の職にまあしばらくぶらぶらしていよう。酒にふけるのにはわずかな給与を当てにし、狂人ぶりの歌を歌つて尊い御代に我が身を寄せるばかりだ。以前はあれほどに故郷洛陽に帰りたいと思つたものが、その気持ちも失せてしまい、今はただひとり返り、つむじ風に顔を向ける。

この詩は、「戯題詩」の中で最も早く、天宝十四載（七五五）十月に作られた。この時まで、杜甫は「君を堯舜の上に致し、再び風俗をして淳からしめん」（『奉贈韋左丞丈二十二韻』『詳註』卷之一）という志を抱き続けて、この前年にも「西岳に封ずる賦」（『詳註』卷之二十四）を皇帝に獻じて仕官を求めていた。その杜甫がやつと任命されたのは、最初河西の尉であった。題下の自注に「時に河西の尉を免ぜられ、右衛率府兵曹と為る」とあるが、詩の冒頭には「河西の尉とならず」とあり、実際に一旦河西の尉となつたかどうかははつきりしない。もし、杜甫が自らの意志で辞退したのならば、

それは何故か。もちろん、家族をかかえての窮乏はあつたが、彼の希望は、長安で自分の志が活かされるような官職、つまり、中央政治のそれも中枢部に就くことであり、西本氏が指摘するように、彼はまた、自分はそあるべき人間だという自負と使命感も人一倍強かつたから、河西の尉のような地方の一微官など思いも寄らなかつたにちがいない。兵曹参軍事も文官ではなく、ましてや年来の志を果たすことが望めるような高官ではない。胸中には不如意の憤りがうず巻いていたが、とりあえず、一地方官となることを拒んで、一応は中央の官職に就いたのであつた。

この詩は「戯れに贈る」と題しながら、贈る対象を示していない。一体誰に贈ったのであらうか。この点については「贈」字の可否をめぐり、後述のようにすでに一応の検討がなされているが、ともかく『杜詩詳註』に引用する『杜臆』（王嗣奭撰、林非聞藏鈔本）には、「戯れに贈るとは、公自ら贈るなり。晚唐の人の自貽、自贈等の題は此れに本づく」（戯贈、公自贈也。晚唐人自貽、自贈等題本此）と注している。⁽⁹⁾ この『杜臆』の説のように、杜甫は自分自身に詩を贈つたと私も考えるが、それでは何故ほかでもない自分に詩を贈らねばならなかつたのか。或いは、詩を贈るというポーズが必要だつたのか。この問題は非常に重要な意味を含んでいる。しかし、ここでは問題を提起するに留め、詩の内容及び表現の具体的な検討の後、再び考察することとした。

先ず、首聯は言うまでもなく『晋書』隱逸伝の陶潛伝に見える故事——淵明が県令であつた時、「吾、五斗米の為に腰を折ること能はず。拳拳として郷里の小人に事へんや」と印綬を解いて隠退した——を踏まえている。

陶淵明は、杜甫が先人の中でも特に尊敬していた詩人(9)だが、このように潔く彭沢県令を辞して退隠している。その淵明と同じく、杜甫もまた河西の尉は辞退したのであるが、結局、兵曹参軍事となつた。それが、かれをこの詩の制作に駆り立てた苦惱の発端である。ようやく官職に着くことができたのであるから、他人から見れば喜ばしいことにもちがいないのだが、杜甫の心情は屈折している。「淒涼」の語は河西の尉を辞退した時の心情であるが、それは兵曹参軍事と

なつた今もなお消えることはなかつた。長い苦節を経たあとに、今ようやく現実のものとなつた官界への参入を、かれは「淒涼」の心情で受けとめなければならなかつたのである。一体、杜甫は「淒涼」という語によつて、どのような心情を表出しようとしたのか。同年の作、「去矣行」(『詳註』卷之三)では、

君不見韁上鷹

君見らずや 韁上の鷹の

一飽卽飛掣

一たび飽かば即ち飛掣するを

焉能作堂上燕

焉んぞ能く堂上の燕の

銜泥附炎熱

泥を銜んで炎熱に附すを作さん

野人曠蕩無覗顔

野人曠蕩として覗顔なし

豈可久在王侯間

豈に久しく王侯の間に在るべけんや

一野人の私は権力にこび詭うのはまつぴら、いつまでも、王侯の間にはいられないーと辞職を望む気持ちを詠じてい
る。いかに杜甫が、この仕官を不如意に思つていたかが分かる。杜甫が「淒涼」で表わそうとした心情も、これとそ
遠くはない。

この語は、私見では従前の詩にあまり用例がなく、わずかに庾信に一例、李白に一例見える。そして、杜甫はここで
特に庾信の「擬詠懷時二十七首」の第十一の冒頭に、「搖落 秋の氣為り、淒涼 怨情多し」とあるのを意識してこの
語を使つたのだろう。この詩は祖国梁の滅亡という辛酸を嘗めた庾信が、北周にやむなく帰順した後、梁の亡国の怨み
をうたつてゐるのだが、この二句で「庾信はまずもの悲しい秋の到来を描いて、やがて訪れる亡國の序曲としている」⁽¹⁰⁾
のである。「淒涼」は秋の荒涼とした、ものさびしい情景描写であると同時に、淒絶なまでに冷たく寂しい庾信の心象
風景と言つてよい。杜甫には十二例の用例があり、例えれば、この詩の二年後、至徳二載(七五七)の作とされる「京よ

り竄れて鳳翔に至り、行在所に達するを喜ぶ三首」(『詳註』卷之五)には、

愁思胡笳夕 淫涼漢苑春 愁思す 胡笳の夕 淫涼たり 漢苑の春
とあり、また、「北征」(『詳註』卷之五)にも、

淵涼大同殿 寂寞白獸闥 淫涼たり 大同殿 寂寞たり 白獸闥

とある。従来、これらは「ものがなし」などと訳されて来た。⁽¹⁾なるほど、この二例は共に安禄山の乱によつて天子及び百官が成都へ逃れたあと荒涼としたさびしい都の情景を詠じたものである。しかし、単にその状況を描写しただけではなく、杜甫の心のフィルターを通した深い喪失感をも表出したものなのである。

「官定まりて後戯れに贈る」詩の場合も単に「ものがなし」ではなく、やはり喪失感を表しているのに違いない。かれは河西の尉は辞退したもの、兵曹參軍事の官職に就いたのであり、官に就いたがゆえに、以前から「君を堯舜の上に致したい」と念願していた志も、使命感も、また強い自負心も全く打ち砕かれてしまつた。その心の痛みが表現されているのである。杜甫が、陶淵明のように潔く官を辞して節を守り抜き得なかつたのは、長く仕官を懇願し続けて、ようやく与えられた官職を一度までも捨て切れなかつたためであり、また、生活の窮乏から家族を救うためでもあつただろう。それは、おそらくさんざん迷つた挙句の選択であつた。しかし、そうであつても、自分が守り貫いてきた志を貫けなかつたという自責の念からは逃れようはずがない。杜甫は、自ら節を捨てたに等しいと考えたがゆえに、その喪失感を「淵涼」という言葉で表現したのである。それは、杜甫にとって精神面での自殺行為とも言うべき精神基盤の喪失であり、とても日本語の「ものがなし」では言い尽せぬ空虚感と、胸の内から突き上げてくる身を苛むような悲しみであつたに違ないからである。

頸聯では自分を「老夫」とい、頸聯では「狂歌」すると表しているのをはじめ、これからいよいよ官職に就くとい

うのに、しばらく率府にぶらぶらしていよう（率府且逍遙）とか、そうかと思えば、まるで酒を飲むために働くかのよう（耽酒須微祿）にいうなど、この二聯は自分の姿を諧謔的、滑稽に描出している。「淒涼」な気持ちに塞がれていればこそ、あえて自分の本音を吐露しようとすれば、滑稽を演じるというポーズをとり、いわば自己を仮面で覆って、なお自嘲する以外になかったということなのではないか。この自己に向けられた笑いの中にこそ、杜甫の言いしれぬ悲しみを読み取ることができる。

中国には古来、楚狂接輿や箕子をはじめとする〈佯狂〉、つまりにせ氣ちがいの伝統があり、彼らは世の乱れを風諫したが聞き入れられず、狂人を装つたのであった。杜甫の「狂歌」もやはり、狂したふりをすることで、自己の心情を開陳することである。

杜甫の「狂」の用法には例えば次のようなものがある。

尙憐詩警策

猶記酒顛狂

尚ほ憐む 詩の警策

猶記す 酒の顛狂

——「戯題寄上漢中王三首」其三（『詳註』卷之十一）

唯君最愛清狂客

唯だ君 最も愛す 清狂の客

百遍相過意未闌

百遍相過ぐるも 意未だ闌まず

——「遣悶、戲呈路十九曹長」（『詳註』卷之十八）

欲墳溝壑惟疎放

溝壑に墳まらんと欲するも 惟だ疎放

自笑狂夫老更狂

自ら笑ふ 狂夫老いて更に狂なるを

——「狂夫」（『詳註』卷之九）

この他に「狂歌行、四兄に贈る」（『詳註』卷之十四）と題する詩もあるが、いずれの「狂」も、結局は自分を表現する

のに用いている。先の句に戻ると、杜甫が「狂人ぶりの歌を歌つて、尊い御代に我が身を寄せるばかりだ」と詠するのは、自分の懊惱や失望・悲嘆などをすべて捨象し、自らを一たび突き放して、更に生きざまを問い合わせ直そうとする表現ではなかつたか。それは、容赦のない苛酷な苦みである。しかし、そのような緊張した表現であるからこそ、その滑稽さの中に、胸に迫るような杜甫の嘆きや失望の深さを感じられ、また、己のような俊逸な才能を拔擢しない為政者への痛烈な批判が暗示されるのである。

さて、最後の句の「風飈」は何を表現するのだろうか。他の杜甫の用例六例中、五例までが、夷狄の軍や賊軍、戦乱などを、直接、或いは暗に表していること、また、第二句の「淒涼」の場合と同様、やはり庾信が梁陥落の様と亡国の怨みを詠じた「哀江南賦」に二度も使用されていることなどを考え併せると、この「風飈」も、次第に唐朝内部を侵食しつつある政治の腐敗への暗い予感、やがて亂世が訪れるのではないかという危機感を象徴していると言えば穿ちすぎであろうか。この一句は、それをどうするすべもなく、砂を噛むような思いを懷きながら、しかしながら、現実社会を見つめずにおれない、そのような運命的な存在としての自分の姿を象徴させていよう。まさに、安禄山が烽起したのは、この年の十一月のことであった。

以上、詩の表現に沿つて考察してきたが、高い理想と人並みはずれた自負を懷いて、長年仕官を求めて来た杜甫は、今更、このような微官を与えられたことに、非常な打撃を受け、また、そのような職を甘んじて受けた自分に対してもやりきれぬ思いを懷いていた。しかし、このような状況に耐えかねて、どうでも一度自分を突き放して客観的に見つめようとする時、詩題に「戯」と冠して、滑稽の仮面を被るほかなかつたのであろう。それをカムフラージュだと批難するのは簡単である。しかし、杜甫にとってはカムフラージュ以上に抜き差しならぬ重い意味を持っていたのである。不遇の嘆き、自ら志を曲げたことへの自責などに杜甫は打ちひしがれていたにちがいない。そうであるからこそ、この

「戯題詩」は、懊惱する自分自身を通して客観視し、そこから再生への活路を模索する詩であり、換言すれば、自分の嘗みの根蒂を問う詩とならざるをえなかつたのである。

四

「戯れに鄭広文に簡し、兼ねて蘇司業に呈す」（『詳註』卷之三）は、やはり同年の天宝十四載（七五五）の作である。

廣文到官舍 繫馬堂階下 広文 官舎に到り 馬を繫ぐ 堂階の下

醉則騎馬歸 頗遭官長罵 酔へば則ち馬に騎りて帰り 頗る官長の罵りに遭ふ

才名三十年 坐客寒無氈 才名 三十年 坐客 寒くして氈無し

賴有蘇司業 時時乞酒錢 賴ひに蘇司業有りて 時時 酒錢をあた乞ふ

ここでは、前詩の自己描写が友人の描写に置き変わつてはいるが、やはり滑稽な描写である。この時、友人鄭虔は広文館博士。『旧唐書』（卷四十四・志二十四・職官三）によれば、正六品上であるが、天宝九載（七五〇）に初めて置かれ、至德（七五六—七五七）にはもう廃されている。更に『新唐書』（卷二百一・列伝第一百二十七・文芸中）によると、玄宗は鄭虔の才能を愛して新たに広文館を設けて初代の博士に任命したが、鄭虔は、その役所がどこにあるのかを知らず、宰相に訴えたというから、名前だけの閑職だつたのである。⁽¹²⁾

志を同じくする親しい友人の不遇なあり様は、わが身のそれと重なつて、杜甫を苛んだにちがいない。その友人の不遇への嘆きは、杜甫の中で高じて、己の嘆きや憤りと一体化し、ストレートに表現するには痛切すぎる生々しい感情となつてはいる。しかし、詩にせずにはいられない、それを強いて詩にするには、「戯」と題して滑稽に描くことで直接の抒情性を削り落として初めて、表出が可能になつたのである。また、そのような秀れた才能を抜擢しない権力者へ

の、痛烈な批判ともなつてゐる。しかし、それが、友人の姿に自分自身を重ね合わせ、滑稽を演ずる者として貶め、笑うことを通して生まれてゐることを見落としてはならない。

次に挙げる「戯れに閩郷の秦少府に贈る短歌」(『詳註』卷之六)も、やはり前述の一首と同じ「戯」の意識によつて作られたと考えられる。この詩は、先の二首の作られた三年後の乾元元年(七五八)、左拾遺から華州司功參軍事に赴任していた杜甫が、冬、華州より東都へ向かう折の作である。『元和郡県図志』(卷第六、河南道)によると、閩郷はもと漢の湖県の地で、貞觀八年(六三四)より、河南道の虢州に属する、潼関よりやや東の地である。そこの県尉(從九品上)の秦氏に贈つた詩。

去年行宮當太白 去年 行宮 太白に当り

朝回君是同舍客 朝より回れば 君は是れ同舎の客

同心不減骨肉親 同心 骨肉の親に減はず

每語見許文章伯 每語 文章の伯を許さる

今日時清兩京道 今日 時に清し 両京の道

相逢苦覺人情好 相逢はば苦だ覚ゆ 人情の好きを

昨夜邀歡樂更無 昨夜 歓を邀へて 楽しみの更なる無し

多才依舊能潦倒 多才 旧に依りて 能く潦倒す

末二句は、「昨夜のあなたの歓迎ぶりと言つたら、これ以上の楽しきは考へられないほどでした。あなたは才能が豊かなのに、(県尉を務めておられる今も)昔のままおつとりしておられて、それが私には嬉しく感じられることです。」

この末二句に「戯」の意識がはつきりと表わされている。特に「能く潦倒す」の「潦倒」という語は、全篇の眼目と言

えるだろう。

「潦倒」は杜甫の詩では「登高」をはじめ他に三例見えるが、通説では、老いあらばえて放慢なさまや、官に就けぬままに落ちぶれているさまを表現していると言われている。後世も多くは、老衰や落ちぶれたさまを意味する語として用いられて来た。

ところが、この詩における用法は、それらとは異なっている。嵇康の「山巨源に与へて交はりを絶つ書」（『文選』第4十三卷）に、

足下もしそを勝りて置かずんば、官が為に人を得て、以て時用に益せんと欲するに過ぎざるのみ。足下むかし吾の潦倒。麤疎にして事情に切ならざるを知る。自ら惟ふも亦皆今日の賢能に如かざるなり。

とある。嵇康を官職に就けようとする山巨源に、自分は「潦倒麤疎」（「麤疎」は、そそかしい、疎漏なこと）で、世間の事情に疎いのだから、役人には適さないと辞退している。

『嵇康集校注』（戴明揚注）は、

文選鈔に曰く、潦倒とは、長緩の貌なり。

と注している。挙動が鈍く、しまりのないさまであり、だから役人には向かないという言い訳にもなったのである。

一方、『錢注杜詩』は『北史』の崔瞻13伝を引いて、次のように注している。

『北史』崔瞻伝に、魏の天保以後、吏事を重んじ、容止の蘊藉なる者を謂ひて潦倒と為すも、瞻終に改めず。此れ正に『北史』の語を用ひ、能く潦倒すとは猶ほ其の蘊藉たること故の如くなるを言ふなり。

錢謙益は「潦倒」即ち「醞藉」（心が広くて穏やかなこと、雅量があること）と捉えているのである。

以上三種の用法を整理すると

杜甫の「戯題詩」について

一、後世に派生した落ちぶれた、老衰の様。

一一、ゆるんでしまりのないさま。

三、心が広くて穏やかなこと。雅量のあること。

となる。『詳註』では、一一の「山巨源に与へて交はりを絶つ書」の用法については、更に『抱朴子』の「潦倒疏緩にして、廢弛を致す」を引用し、「此れ乃ち波瀾倒の意」と注している。ゆるんでしまりのないさまである。三の『北史』崔瞻伝の用法については「錢箋は後説に従ふ」とのみ注しており仇兆鰲はどちらの意味に解するとも明言していない。杜甫が、この語で表現しようとしたのは、どちらの意味だろうか。

杜甫は、ここで「潦倒」という言葉の両義性を利用しているのであらう。つまり、閩鄉の県尉である秦氏に、「あなたは多才でありながら、以前のままに（官吏らしいとは言えぬ）緩慢な性格を守っておいでですね」と言つているのである。これは深層においては心からの賞讃なのである。「潦倒」は官吏の適性として考えれば、とても有能、俊敏とは言えぬ性格を言う語であり、世間の常識ではマイナスイメージを帯びている。ところが、それを転じて、官吏でありながら、しかもその人のおおらかで奥ゆかしい本性を保つていると誉め言葉とした点が「戯」なのである。かと言つて、杜甫以前の「戯題詩」のように、言葉遊びに墮しているわけではない。それどころか、この「戯」こそ儀礼を越えた旧情に裏打ちされた友情の発露であつて、友にわが身を重ねて笑いながら、実はまた、世俗の名誉や権勢を得るために齧齧している輩をむしろ暗に笑うものと言えるのである。

以上、第三章及びこの章において、「官定りて後、戯れに贈る」「戯れに鄭廣文に簡し、兼ねて蘇司業に呈す」「戯れに閩鄉の秦少府に贈る短歌」の三首の各々について「戯」の意識を追求してきた。杜甫は「戯題詩」で、多くの場合、自分自身、或いは、自分と志や思想を同じくし、置かれた境涯に違いはあっても同じような感懷を抱いている人物に

「戯」れるのである。生きる苦悩や権勢、世俗への憤りが胸に突き上げてくるから、自分、或いは自分と同じ状況に生きる親しい人物を滑稽化し、からかうのである。しかし、その笑いはいつの場合も究極的には自己に向けられている。「笑われ側の文学」⁽¹⁴⁾と言ふことができよう。からかい、笑いは前時代の詩人達のように外に向つて放たれたままのもの、つまり、「笑い側の文学」ではあり得ない。すべて、自分に還つてくる思索的、自省的な詩である。このように常に自己の痛みを伴つた笑い、滑稽化であり、また、個人的感情を捨象しようとする表現であったからこそ、そこはかとなく読者の胸に迫る、泣き笑いに似た感懷を与えるのである。また、権力者への批判、世俗批判としても、普遍性、説得力を持ち得たといえる。

先の「官定まりて後、戯れに贈る」詩に戻ると、結局、杜甫は詩題に「戯」と加えることによつて、これは「遊びである」「からかいである」という信号を読者に発していたのである。杜甫の場合、何故、とりわけそのような信号を必要としたのだろうか。杜甫はその信号を発することによつて、自ら滑稽を演ずる者、或いは狂者だという仮面をかぶる。それは、杜甫がどうしようもない憂愁に胸塞がれ懊惱し、煩悶せざるを得ない状況に置かれた時、一たび世間の拘束や常識や、自分の面目などというものをかなぐり捨てて、それらを剥ぎ取つてなお残る自分の根蒂を見つめ直そうとする行為だったに違いない。そして、そのような赤裸裸な自分を見すえ、根蒂の、本来あるべき自分自身の姿を模索することを通して憂愁の淵からの再生をはかり、新生面を切り開こうとしたのであった。

五

さて、詩題に「戯」を加えた動機について一応考察したところで、第三章において提出した問題——杜甫は何故、自分に詩を贈らねばならなかつたのか。また、詩を贈るというポーズが必要だつたのか——について考えたい。

前述のように、「官定まりて後、戯れに贈る」という詩題に、王嗣奭は「戯れに贈るとは、公自ら贈るなり」と注している。西本巖氏はすでにこの注に着目して、次のように結論している。

「戯れに贈る」は、「戯れに題す」の誤まりでもなく、また「自らに贈る」と言う狭い範囲に止るものでもなく、広く社会、要路の人々に訴えると共に、激しい血肉自身の「自笑」「自嘲」を内臓した、外向性と内向性との、屈折混合した彼の心情の詩に外ならないと考える。(中略)大切なのは、「杜臆」が「贈」字を特に「題」字と訂正し、この詩に広く社会、為政者に訴える意識が表明せられていると、たとえ一時にせよ考察したという事実である。

この説に概ね賛同できるのであるが、詩題に何故「戯」を付さねばならなかつたのか、という「戯」の意識にもっとこだわる必要があると思われる。

王嗣奭が、王孫旦抄本『杜臆』にあるように「『贈』字誤り有らん。當に是れ『戯れに題する』なるべし」と考えたことがあつたにしても、それよりも、先に挙げた「戯れに贈るとは、公自ら贈るなり」とする説の方がはるかに優れると私は考える。「戯贈」する対象はやはり自分自身でなければならない。自分自身に贈るというのは、人に詩を贈るという贈答詩の形式、或いはポーズを借りて、自己の内面に蟠り渦巻いている情念を客觀化しようとする當みだったのではないか。志を得ぬ失望感、自分をそのようにしか遇さぬ体制、為政者への激しい憤りも勿論あつた。それは、滑稽な描写によつて、確かに真の諷刺と言うべき体制批判、世俗批判となつてゐる。それはそれで非常に意義のあることなのだが、しかし、副次的産物であつて、それにあまり重きを置いた理解は、杜甫の真意を見誤ることになるだろう。杜甫のこの詩の創作の動機はまず、何よりも、淒惨な心情にある自分自身を見つめようとする心の働きに求められる。杜甫の胸には失望感・虚脱感・慷慨などのない混ぜになつた感情が塞がり、それは杜甫自身にも捉えどころのない、煩悶を強いる情念であつたからこそ、彼は詩の創作へとかきたてられ、また、心情を表出するために詩題に「戯」と付さねば

ならなかつたのである。しかし、この「戯」はもぢろん本旨のままに用いられたのではなく、「戯れである」というボーラー、言いかえれば、本音を吐露するための、自己の内面を追求するための「仮面」である。ピエロは顔に彩り仮装することによって、日常性や現実のあらゆる拘束から自らを解放し、滑稽の中に普遍的な人間感情や人生の真理を表現しようとする。それと同様に、「戯」と題するのは、いわば「仮面」を被る嘗みといえる。そして、詩題に「戯」と題すること、つまり「仮面」を被ることは、裏返せば、この詩の創作が、自己を冷めた目で凝視し、自分が今遭遇している状況を問いかねるとするものだ、と暗示しているのである。このような苛酷な試練を課して、しかもなお詩を作らねばならないほどに、杜甫にとってこの時の懊惱は耐え難く深いものであったのだろう。

一般に、仮面を被るという行為は、本心・本性を隠して偽りの姿や態度をつくるうことを意味するが、杜甫においては反対に、「仮面」を被ることが、虚飾をすべて剥ぎとつて、本然的な自分を問いかねす嘗みだったと考えられるのである。

六

そもそも、杜甫における「戯」とはどのような精神であるのか。杜甫の「愁」(『詳註』卷之十八)の自注に「強ひて戯れに具体を為る」とある。とすれば、杜甫にとって「戯」は「強いる」ものである。また、

老去悲秋強自寛　老い^{ゆき}去きて秋を悲しみ強ひて自ら寛うす

——「九日藍田崔氏莊」(『詳註』卷之六)

排闊強裁詩　闊えを排はんと強ひて詩を裁す

——「江亭」(『詳註』卷之十)

杜甫の「戯題詩」について

寛心應是酒 遺興莫過詩 心を寛うするは応に是れ酒なるべく 興を遺るは詩に過ぐるは莫し

—「可惜」(『詳註』卷之十)

と詠じられた句もある。ここで思い合されるのは、『詩經』衛風・淇奥の「善く戯謔すれども、虐を為さず」である。その解釈は、毛伝では「寛緩弘大」と捉え、鄭玄は「君子の徳は張り弛あり、故に常に矜莊ならずして、時に戯謔す」、孔穎達の疏は「其の張弛の中を得たるを言ふなり」と注している。杜甫の「戯」も「張」の振り戻しとしての「弛」つまり「ゆるゆる」ことであらうか。それを額面通りに受けとることはできない。杜甫の「戯」は強いて「寛うす」というポーズである。言い換れば、物事を真正面から、正攻法によってのみ捉えることに行き詰った時に、意識的に常軌を離れて、少しずかに見ることといえる。眞の姿は、物事を一面的でなく多面的に見ようとして始めて捉えられるからであり、また、常軌を離ることは、常識や社会の慣習、世俗の価値観に慣性的に従う、膠着した生から自らを解放し、自己の本然的な生を取り戻し、更に切り開く當みであるから。こうしてみると「戯」の精神は、反骨、或いは革新の精神である。例えば「戯れに六絶句を為る」(『詳註』卷之十一)は、当時、近体詩が一般に定着しはじめると早くも詩人達が、初唐のような詩の革新への意欲を失っていると、痛烈に批判し、警鐘を鳴らすものであるのがその一例である。また、「戯れに題して漢中王に寄せ上る二首」(『詳註』卷之十一)、「戯れに作りて漢中王に寄せ上る二首」(『詳註』卷之十二)は、共に睿宗の長子讓皇帝憲の子、璵に贈った詩である。しかし、杜甫は、璵の才能が秀れているが故に疎んぜられ、実權の伴わない名譽職ばかり空しく与えられているその不遇の境遇に、我が身を重ねて、官僚社会のわくや、或いは世俗的な垣根を越えた友情を詠じている。ここにも、反骨・革新の精神は躍如としている。この他、社会矛盾を痛烈に批判するもの、画贊の通念に一石を投ずるものなど、また、詩体の改革を試みる詩もある。本稿では「戯題詩」の中でも、初期のわずかに三首を中心として、多くの詩に言及することができなかつたが、今わずかに触れ

たように杜甫の戯題詩の大部分は、現実の世界や現状に、また既成のすべての物事にならずます、新生面を切り開こうとする精神に貫かれているのである。

注

(1) 大矢根文次郎「杜詩における、遺興・戯題の詩とその風趣」(『東洋文学研究』第六号、一九五七・十一、早稲田大学東洋文学会)。西本巖「杜甫における『戯題詩』—『官定まりて後 戯れに贈る』詩について」(『小尾博士退休記念中国文学論集』一九七六・三、第一学習社)

(2) 西本巖氏は前掲の論文の中で、杜甫の「戯題詩」の作品数を三十一首としているが、同論文五六八頁、五六九頁に一覧された作品は三十三首である。數え誤りか。さらに、これらに準する作品としては「愁」(『杜詩詳註』卷之十八、自注に「強ひて戯れに呉体を為る」とある)がある。

(3) 『お茶の水女子大学中国文学会報』第四号(一九八五・四)の交流欄において少し述べたように、杜甫にはこの他に、「愁」(注2参照)・「戯れに俳諧体を作り、悶を遣る一首」(『詳註』卷之二十)・「風雨、舟前の落花を見て戯れに新句を為る」(『詳註』卷之二十三)など、杜甫の最晩年に作られた、詩題に「戯」の付された動機に詩体が関わっていると見られる一群の詩がある。その場合の「戯」の意識は、主として詩体の改革に求められ、本稿で探求するもっぱらモチーフに関わる場合の「戯」意識と、根底に流れるものは共通していると思われるが、詳しくは別の機会に考察したい。

(4) 西本氏は「詩題に『戯』字を付することは何も杜甫に始まったことではない」としながら、具体的にその時期には言及していない。丁福保編『全漢三国晋南北朝詩』及び遼欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』によつて検索したところでは、「戯題詩」は梁の武帝の「戯題に作る詩」(『先秦漢魏晋南北朝詩』梁詩卷一)、『玉台新詠』卷七は「戯題に作る」に作つていて、に始まる。ただし、本稿で問題とするのは、作者の「戯」の意識であるから、ここでいう「戯題詩」も、それに直接関わらない作品は考察の対象から除いた。たとえば、戯字が名詞の場合(「觀拔河俗戯」など)、また、単に名詞を修飾する場合(「賦得戯燕俱宿

詩」など)や、具体的動作を表す動詞本来の意味で使われる場合(「與江水曹至于濱戲」など)。

(5) この時代の「戯題詩」は、大まかに言うと、対象の人物をからかう場合と、必ずしも対象を持たず、作者の創作の遊び心を表わす場合の二つのグループに類別できるだろう。西本氏の挙げる例は、後者のグループの傾向が強く、樂府にもつぱら多く見られる虚構性の強い作品であり、いずれも、最後の聯は独白で結ばれている。(「今の懷ひは固より已むことなく、故情、今も余り有り」・「意を託す風流子、佳情 詛ぞ肯て私せん」)。前者のグループでは、例えば、梁の武帝の「戯れに作る詩」は、妓女を古の美人に比してひとしきり誉めた後、次のように結んでいる。

徒聞殊(珠)可弄 定自乏明璫 徒らに聞く 珠弄す可しと 定めて自ら明璫に乏しきならん。

『列仙伝』に見える一人の江妃が漢水のほとりで出会った鄭交甫に佩玉を与えたという故事を踏まえて、「玉を贈られると聞いたのも無駄だつたなあ。あなたたち妓女は貧乏でき」と玉の耳飾りさえ持っていないにちがいない」とからかつた作品である。ただし、この時期の例外的作品に、北魏の褚縕の「戯れに為る詩」(『先秦漢魏晋南北朝詩』北魏卷)があり、これは梁から北魏に出奔した作者が、北魏の風俗を痛烈に批判したもので、唯一、自己の生きざまに觸れる詩といえる。

(6) 西本氏はこの時期について、李白の「戯れに鄭栗陽に贈る」と「姪の良が二妓を携へて会稽に赴くを送り、戯れに此の贈り」とを挙げて、六朝、齊梁の余習を出るところは少しもないと述べている。しかし、例えば隋の魏澹の「園樹に巢くふ鵲有り、戯れにて之を詠ず」(『先秦漢魏晋南北朝詩』隋詩卷)は、北齊・北周・隋の三朝に仕えた彼の人生ながらに屈折した心情を鵲に投影して詠じている。それは、直言のはばかられる時人への批判であると同時に、客観的に描写することで、自己の生きざまを問う詩であったのではないか。それゆえ、「戯」であるといふポーズが必要だったのであろう。

(7) 河西の尉の解釈には、河西節度使の尉官とする説、今の雲南省河西県の尉官とする説などがあるが、『中國歴史地図集』第五冊(譚其驥主編、一九八一、地図出版社)には、今の陝西省合陽の東約三十キロの地にも河西と記し、これは『元和郡縣圖志』の夏陽県の項の「武德三年、邵陽を分けて、此に河西縣を置く」との記載に一致する。考を待ちたい。いずれにしても、地方官であることには變りがない。

(8) 西本氏の同論文に、この『杜臆』に関する詳細な調査がある。それによると、『杜臆』には二系統のテキストがあり、『詳註』を著した仇兆鰲は林非闇藏鈔本によつてこの語を引用しているが、上海図書館所蔵の、王嗣奭の孫、王孫旦の抄本による通行本には見えない。

(9) 次に挙げる一首を含めて、陶淵明の名を詠み込んだ詩だけでも十首を数える。

。寛心應是酒 遺興莫過詩 此意陶潛解 吾生後汝期 (『可惜』『詳註』卷之十)

。爲人性僻耽佳句 語不驚人死不休 (中略) 焉得思如陶謝手 令渠述作與同遊 (『江上值水如海勢聊短述』『詳註』卷之十)

(10) 興膳宏『庾信』(集英社、一〇四頁)

(11) 「ものがなしき貌」(鈴木虎雄訳解『杜少陵詩集』「官定後戯贈」の注、続国訳漢文大成)

「おおさむと淋しい」(黒川洋一注『杜甫(上)』「喜達行在所三首其一」の注、岩波書店)

「ものさびしい」(『同右』(下)「北征」注)

「…そのさびしさに堪えられなかつた」(日加田誠著『杜甫』「喜達行在所三首其二」の訳、集英社)

「ものさびしい」(『同右』「北征」注)

(12) 一方、蘇司業(源明)は国子監司業で、從四品下。

(13) 『北史』(卷二十四)崔瞻伝は次の通り。瞻性簡傲、以才地自矜、所與周旋、皆一時名望。(中略)性方重、好讀書、酒後清言、聞者莫不傾耳。自天保以後、重吏事、謂容止醜籍者爲潦倒、而瞻終不改焉。

(14) 柳田國男著『不幸なる芸術・笑いの本願』の「戯作者の伝統」(五五頁、岩波書店)に次のように述べられている。
笑いが文学のおもてに記録せられて、今の世に伝わっている様式には、二通りの岐れが古くからあつたと思われる。单なる滑稽文士とか戯作者とかいう類の、偏よつた名称をもつて総括し得ないわけは、その笑いを筆にしようとする動機、乃至は笑いに対する態度に、かなり著しい相異が認められるからである。仮に簡便にその一つを笑われ側、また他の一つを笑い側の記録と名づけておいて話を進めるが、後々に多分もつと心理学的な、尤もらしい名ができることであろう。

卒業論文・修士論文題目

昭和六十一年三月卒業（十名）

飯田 裕子 元詩研究—元詩四大家を中心として—

飯村由紀子 『詩經』の興に関する研究

稻見 知子 唐宋間における李杜論

折笠 摂子 山梨稻川の古韻研究について

塩田 淳子 陳伯吹について—幻想論批判を中心とした児童文

学論一

昭和六十一年三月修了（一名）

岡田 祥子 王漁洋の『唐賢三昧集』についての一考察

田中美知子 『貞觀政要』の研究
内藤 洋子 『懷風藻』の中の“月”について—比喩表現を中心とする「万葉集」・六朝詩との比較—

中田 成美 温庭筠詞の世界
根本 由紀 唐代传奇小説研究—冥界説話をめぐって—

前川 直子 江戸後期の詩人 広瀬旭莊研究